

教育総合センター

NO. 151

だより

平成 31. 3. 1



生涯学習プラザについて

～人づくり・つながりづくり・地域づくり～

社会教育部

部長 牧 直宏

本年4月1日から、公民館は新たな市長部局の施設「尼崎市立生涯学習プラザ」に生まれ変わります。これは、地域振興体制の再構築の一環として取り組むものですが、今、なぜ、生涯学習プラザに変わるのか、ご紹介します。

本市では、平成28年10月に施行した「尼崎市自治のまちづくり条例」の目的「自治のまちづくりを推進すること」を具現化すべく、平成30年3月に「自治のまちづくりに向けた地域振興体制の再構築（取組方針）」を策定しました。

人口減少と少子高齢化の進展、さらに地域コミュニティの希薄化が進むとともに、子ども・高齢者の居場所づくりや見守り、更には災害時の対応などの課題が浮き彫りになり、また、複雑、多様化しています。こうした課題は、様々な主体がそれぞれできることに取り組み、また連携することで改善が期待できます。

このように身近な課題を知り、主体的な学びを通して地域社会に関心を持ち、そして、自分にできる何らかの行動をはじめの中で新たな気づきを得て、次の活動につながる。こうした循環がこれからは重要になると考えています。

今回の取組方針では、学びと活動の循環を重視するとともに、行政が必要な体制を整えることで地域の力が高まり、ひいては地域における課題解決や魅力向上の取組が広がることを目指しています。そうした中で、これまで地域に開かれた学びの場として利用されてきた公民館6館と貸館中心である地区会館6館の計12館を

「生涯学習と自治のまちづくりを支える拠点」と位置づけることとしたものです。

この生涯学習プラザでは、市長部局と教育委員会が相互に連携・協力し、「人づくり」、「つながりづくり」、「地域づくり」に資する取組を推進していきます。具体的には、これまで公民館で実施してきた人権や平和といったテーマの講座や教室、各学校と共に取り組んできた学社連携事業等を継承するとともに、地域課題をテーマとした講座の内容を充実させ、その取組を評価・検証しながら、社会教育の発展を目指していきます。さらに職員は、小学校区と同じ地域を担当（地域担当職員）し、学校・園、全小学校での設置を目指している地域学校協働本部はもとより、地域で活動するNPO等の団体や地域の方々ともお互いに相談しあえる関係をつくり、地域の課題解決や魅力向上に向けた学びや実践的な活動を支援していきます。

この生涯学習プラザの将来の姿を決めるのは、地域に関わる全ての皆様、そして、地域と共に考え、行動できる職員であると考えております。これまでの公民館と同様、誰もが気軽に足を運ぶ広場（プラザ）であり続けることはもちろん、様々な人との「出会い」、「つながり」を大切に、学んだことを地域の活動につなげていく拠点となるよう、地域担当職員も努力し、学びを重ねてまいりますので、教職員の皆様におかれましても今回の取組にご理解とご協力を頂きますようお願い致します。



授業を「子どものもの」に —国語科アクティブ・ラーニング部会の 学びから—



はじめに

市内国語科アクティブ・ラーニング部会に入って4年目となる。桃山学院教育大学准教授の今宮信吾先生や指導主事のご指導の下、国語の授業づくりについて学んできた。そこで学んだ最も大切なことは「授業を子どもの側から考える」ということである。

「単元計画」を子どもとつくる

子どもたちが主体的に動く授業にするためには、単元の初めに子どもたちと一緒に単元計画をつくるのが大切である。単元のゴールに向かって必要な学習を一緒に考え、黒板に並べていく。模造紙等を書く際は十分な余白をとっておき、学習を進めながら子どもたちと一緒に加筆修正していく。

「めあて」を子どもとつくる

教師が示すめあてから、子どもたちがつくるめあてへと転換を図る。単元計画を子どもたちと立てることができていれば、「今日は何をするんだった?」「今日の授業の終わりに何ができるようになっているといい?」と子どもたちと対話することで、めあてを一緒につくっていくことができる。子どもたちが必要と感じる学習が本時のめあてになることで、主体的な学びへとつながっていく。

「ルーブリック」を子どもとつくる

本時のめあてができれば、本時の評価が見えてくる。「今日は何ができたか○(まる)?」と子どもたちに問うことで、一緒に学びの判断基準を考えたい。教師として子どもたちに身に付けさせたい力と、子どもたち自身が身に付けたい力が一致するようにすることが大切である。

「ふり返り」は「①今日のめあてに対する私の姿 ②理由 ③その授業特有の出来事

④次時に向けて」の四つを基本としている。「今日の私はAでした。〇〇ができたからです。〇〇さんの〇〇という考え方は、私とは違ってとても心に残りました。次の時間は〇〇を考えたいです。」というような記述になる。教師側の評価と子ども側の評価が違ってくことも当然あるが、その場合は教師が、ノートに教師としての評価を書き入れる。教師と子どもたちの評価が一致していくように、これを繰り返す。その元になるのがルーブリックである。

ダイナミックな活動を

教師が楽しめば、子どもたちも学習を楽しむことができる。「市長に手紙を書く」「校長先生からのミッションを解決する」「保護者に配布する制作物を作る」「他校の児童と交流する」など、相手や目的を社会と接点のあるダイナミックなものにすると、子どもたちは俄然やる気を出す。一学期に一度、少なくとも年に一度は、こういう学習展開を仕組みたい。

地域教材を開発する

昨年度、尼崎には市歌(市民にもほとんど知られていない)が存在することを知り、その歌詞を書き換えるという学習(「尼崎市歌をつくろう」)を、国語科と社会科の教科横断的な学習として展開した。その他にも「契沖」「尼崎に伝わる昔話」など、尼崎には興味深い題材が数多くある。

おわりに

授業を「子どものもの」にするということは、全てを子どもたちに任せるということではない。教師側の研究と計画が重要となる。子どもたちも私たちも、両方がわくわくするような授業づくりを、これからも目指していきたい。

(尼崎市立立花小学校教諭 宇都 亨)

☆☆ 教育相談の経験から ☆☆ ～「観る」ことと「聴く」ことを通して～

教育相談では、臨床心理士と我々指導主事が学校の先生方や関係機関との連携を取り、教育相談を進めています。ここではこれまで2年の経験と中学校現場での経験をもとに、考えたこと感じたことをお伝えします。

教育委員会での教育相談には、「不登校」や「友達となじめない」「学習でのつまずき」といった様々な悩みを抱えた子ども達やその保護者が相談に来られます。相談を進めていくうちに、表面上に現象として現れる問題、例えば「友だちとのトラブルを繰り返してしまう」や「不登校」の根底には、あまり意識されていなかった心理面や発達面での課題が隠れている事がよくあります。「学校に行きたくない」といったことに対する相談が、面談を進めていくうちに「友達とのトラブルを繰り返して嫌になった」ことが明らかになり、さらに面談を続けると、「発達に課題があったためにこだわりが強く、そのために友だちとの衝突が起りやすかったこと」が分かりました。この場合は、「学校に来させる指導」や「トラブルを起こさせない指導」ではなく、「発達の特性を理解した対人関係構築の指導」が必要になります。私もこれまで学校では、つい表面上に現れる現象に対する対症療法的な指導になりがちでなかったかと反省しています。また、子どもの発する小さなサインに気づく事で子どもや親の「しんどさ」をより小さなうちに楽に解消できると感じることも多くありました。

では、子どもの発する小さなサインに気づき、根本的な原因を探りあて、素早く対処するにはどの様にすれば良いのでしょうか。

すでに多くの先生方が実践されていると思いますが、子どもたちをよくみる事が大切です。この場合の「みる」は「観る」と意識してください。普段とは違うちょっと

した言動の変化がSOSのサインかもしれません。また、少しでも変化に気付いたならば、ぜひ声をかけてみてください。そこで貴重な情報が得られるかもしれませんし、特に何もなかったとしても、常に「観て」もらえている事が子どもたちの心の安定につながります。注意していただきたいのは、「聴く」姿勢ではなく「訊く」では子どもは構えてしまいます。もし何か悩みを抱えていたら「あなたを助きたい」「力になりたい」という思いを前面に出して、わがままと思えることでも一旦は受け入れてあげましょう。注意は後の指導の中でいくらでもできます。子どもを思うあまり、教師の方が話してしまいがちですが気をつけたいものです。指導に関しても、心のケアには時間がかかります。ゆっくりと癒すイメージで時間をかけて「見て」あげてください。「待つ」ことが必要なこともあります。

とは言え実践するには、日々忙しい学校現場では意識し続けるのは難しいこともあります。そこで大切なのはチームで取り組むことです。学年やその他の組織で助け合い、時にはスクールカウンセラーなどの専門的な意見を取り入れながら、出来るだけ早くひとりでも多くの子どもを助けていただけたらと思います。

最後になりますが、教育相談担当では悩みを抱える子どもたちやその保護者の皆さんが、少しでも早く悩みや問題を解決し、生き生きと毎日を過ごせるよう支援に努めています。そのためには子どもたちが一日の大半を過ごす学校との連携が非常に重要と考えております。

今後とも子どもたちの笑顔のために力を合わせて取り組んでいきましょう。よろしくお祈りします。



(教育相談・特別支援担当係長 比嘉 勲)

教育情報コーナーのお知らせ

☆教育情報コーナーのご案内

教育情報コーナーでは、先生方に利用していただきたい本や資料、雑誌等を整備しています。教育総合センターでの研修や会議の時など、ぜひお気軽にお立ち寄りください。（3F 教育情報コーナー-mini）

また、必要な図書、資料等のご相談にも応じております。お気軽にお尋ねください。

【国語に関する図書】

- ・『対話的に学び「きく」力が育つ国語の授業』益地憲一
監修・国語教育実践理論研究会 編著／明治図書
- ・『筑波発 読みの系統指導で読む力を育てる』
筑波大学附属小学校 国語教育研究部 編／東洋館出版社
- ・『小学校国語 3つの視点でアクティブ・ラーニング』二瓶弘行・青木伸生 編著／明治図書
- ・『音読・朗読 目的に応じた多様な方法』久保伸夫・西田拓郎 編著／東洋館出版社
- ・『話せない子・話さない子の指導』野口芳宏 著／明治図書
- ・『「子どもの論理」で創る国語の授業 一読むこと一』白坂洋一 編著／明治図書
- ・『教えて考えさせる中学校国語科授業づくり』刀禰美智枝 著／明治図書
- ・『主体的・対話的で深い学びを実現する 授業&評価スタートガイド』田中洋一 編著／明治図書
- ・『中学校国語科つまずき対応の授業&評価プラン』吉川芳則 編著／明治図書



【その他の新着図書】

- ・『学校教育と情報機器』堀田博史・森田健宏 編著／ミネルヴァ書房
- ・『これならできる 小学校教科でのプログラミング教育』赤堀侃司・久保田善彦 著／東京書籍
- ・『東井義雄 子どものつまずきは教師のつまずき』豊田ひさき 著／風媒社
- ・『「ものの見方・考え方」とは何か―授業力向上の処方箋―』北 俊夫 著／文溪堂

(担当 松浦)

☆教育総合センターは、知の宝石箱！ 「ひと咲きタワー」は、教職員の学びのタワー！

【本の紹介】

■『「学力」の経済学』（株式会社ディスカヴァー・トゥエンティワン 発行日 2015年6月18日第1刷）

著者 中室牧子：コロンビア大学で博士号。慶應義塾大学総合政策学部准教授。専門は教育経済学。

議論するとき絶対的な信頼を置いているものが「データ」。学校とはただ単に勉強する場所ではなく、先生や同級生から多くのことを学び非認知能力を培う場所。人生を成功に導くうえで重要な非認知能力は「自制心」と「やり抜く力」。心理学の貢献によって非認知能力は数値化され、経済学の貢献によって、非認知能力の投資は子どもの成功にとって非常に重要であることが多くの研究で示されているという。

■『AI vs 教科書が読めない子どもたち』（東洋経済新報社 2018年2月15日発行 第一刷発行）著者 新井紀子：国立情報研究所教授。イリノイ大学大学院数学科課程修了。博士（理学）。専門は数理論理学。

かつて数学者の藤原正彦氏は、学校教育に必要なもの「一に国語、二に国語、三、四、がなくて、五に算数」。新井紀子氏は、「一に読解、二に読解、三、四は遊びで、五に算数」。「遊び」は、手先や身体を動かす、モノに頼らない遊び。また日本の学校が誇る、給食当番や掃除当番などの班活動が大切という。

■『小学校でこれだけは教えた教科のプロが教える授業づくりの極意』（東洋館出版社 2015年8月10日第1刷発行）二瓶弘行：2018年3月 24年間勤務した筑波大学附属小学校を退官。現在桃山学院教育大教授。

小学校教師は、毎日登校してくる子どもたちに、国語・社会・算数・理科・音楽・体育・図工・道徳・生活総合・外国語の授業を通して、人として「生きる力」（学力）を育むために、教師としての持てる力と思いを注ぎ続ける。この教科で育むべき学力とは何か。どのように授業を作っていけばいいか。本書は、筑波大学附属小学校の教師が毎日の授業づくりにおいて、その「柱」「極意」をシンプルに紹介している。

教育総合センターには、すてきな本がたくさんあります。

(担当 谷口)